

論 文

韓国戦後文学の様相変化

——戦後の実存意識を中心に——

世 古 口 真

要 旨

韓国の戦後文学は朝鮮戦争（1950～53）の渦中から戦後四月革命（1960）の前までという空間において形成された文学をいい、近代的な性格の解放空間の文学を現代文学に転換させ、人間の存在を解明しようという存在論的文学の特徴を持ち、1960年代の民族的な自我の覚醒と社会の認識として変貌していく文学の基盤になったものをいうのだが、この時期、韓国小説文学は朝鮮戦争の体験により第2次世界大戦以後の西欧の戦後文学の一般的様相をみせ始める。戦後世代が持っていた不安感、焦燥感、虚無感等は西欧実存主義と連結される素地を持っていたのだが、その戦後の韓国現実に今までなかった様相が小説のジャンルを通し、具体的な現実像を現わせ始めるところに1950年代以降の韓国小説に展開された発展様相の種を探し出す事ができると考えられる。従って本稿では戦後韓国小説がみせたいくつかの特性を分析する事により、今日の韓国小説文学が持つ属性の根拠を考察する。

キーワード：「生」、実存、虚無主義、悲劇的感性

I 文化様相の変化

韓国戦後文学は、1950年代の文学として1950年代の文学的空間としての特徴を持つ。1950年代の小説の性格を究明しようとする時、これと不可分の関係を持っているのは戦争の経験と影響力である。それほど50年代とその状況は一言でいって人為的な災難の頂点である戦争の時代であったと共に戦争体験とその処理、戦後の荒涼とした雰囲気が遍在する受難の時代であった。従って文学がその時代の葛藤と苦悩の「生」と夢を反映するという普遍的な現状はあえて勘案しないとしても50年代以来、韓国の現代小説の諸般内容と構造は戦後体験と影響を排除しては考えられない程、朝鮮戦争（6・25戦争）⁽¹⁾は重要な発生論的基盤であるといえる。⁽²⁾このような基盤下に形成された50年代の小説はその性格上、戦争または戦後小説⁽³⁾であるといえる。韓国現代史において一番切迫した状況だった6・25を体験した50年代文学は戦後意識の自覚による民族の悲劇を克服しようという意志で現れ、人間性本質の問題と共に腐敗した社会と人間告発の形式を持ちながら従来の文学とは違う観点から社会と人間を照明し、技法の革新を通じて戦後文学が形成される。そうした戦後文学の一般的共通性として既成価値感の喪失、戦後の悲惨さからくる不安と虚無意識、極限状況を乗り越え、打ち勝とうとする意志からくるあがき、葛藤が描き出されている。

解放⁽⁴⁾の喜びもつかの間、6・25の悲劇的戦争が勃発し、ようやく休戦になり韓国に平和の光が宿ろうという頃、文化的変革の突風に巻き込まれる事になる。この変革の文化的徴候はいくつかの側面から新しく定義されていく文化様相に大きく影響を及ぼすものであった。それはまず、西洋文化の直接接触による固有文化の混流現象が挙げられる。解放以前、日本という窓口を通し入ってきた西洋文化が日本的土壌により変化した形で渡ってきた時期とは違い、世界的文化潮流を直接受容する事ができたという点である。実際に社会全般にかけ、広範囲なものとして日常生活様式から平凡な思考の領域を経て、思想体系や論理的精神世界に至るまで影響を受けた。

2番目としては戦後社会現象から探し出せる自我意識の新しい傾向が挙げられる。それはまず具体的な実状からみると家族離散、または戦傷による手足の損失、または生活基盤の喪失により生じる自我の虚無的イメージにはじまり、価値体系を成立し、これにより自我を成熟させようという意志を失ってしまうといった内容で現われてくるようになった。

3番目はこのような社会現象が変動と共に伝統的因習や文化習癖を破壊してしまった現象を挙げられる。それは東洋的な倫理観の崩壊ともいえる様々な現象が現われた。混んとした社会構造の中で生き残る事を望むところからくる「生」の絶対的価値を喪失してしまう事で一日、一日の生活を考えずにはいられないケースである。

戦後の実状は自我意識の体系から社会現状の構造的崩壊とさらには新しい秩序に向かう

混とんとした状況を成していた。この新しい秩序に向かう無秩序な混とん様相は文化の新しい突風を一度に押し寄せさせる、また一つの要因としても作用している。その中でも特に小説文学は小説が現実を反映するものではなくてはならないという古典的リアリズムの立場からみても現実的次元の無秩序な「生」の姿を晒しださなければならないものであった。現実を真剣に観察し、その作品の中に可能な最大の真実を内包させようという作家の視野を通して、戦後の社会性とそれに投映される人間を形成する事により、この無秩序な現実以前の時代が経験できなかった多くの小説的变化をもたらした。この変化は近代小説が持っていた小説の様式としては受容できない人間の問題を扱う時に生じる様々な多様化、または小説の主人公を選定しながら作り出される性格の創出方法の多様性でもありえる。それだけではなく、小説を包み込んでいる思想的潮流の変化を受容し、その意味に従った人間観の修正を通じ、小説内の視角を変えていく過程での変貌ともみる事ができる。即ち、小説が単純に現実を再現させていくという過程で発展し、再現の方法においてどのように再現させる事ができるのかという点で提起される変化を予想できうる。さらに小説の現実が真実を提起するといった時それは真実それ自体に対する新しい提起の様式である。このような観点は小説がみせてくれる真実は小説家によって成し遂げられる完全な幻覚であるといえる。このような視点でみる時、戦後の作家たちが根を降ろして生きている現実の再現において小説の構造的変化の必要性を切実に感じられるであろうという仮定とそれを証拠とするいくつかの小説的転換の徴候を発見する事ができる。その一つの例として心理主義的傾向の登場は明白な証拠になりうる。

20室奄 段拭 羨嬢級檣辞 辞姥税 庚俳、働備 社竺庚俳拭 赤嬢辞 朕陥空 穿発奄亜
 龜掘梅製精 確軒 硝形遭 紫叔戚陥。戚獻郊 薄企 宿軒社竺 拙亜級精 曾掘拭 妊薄
 災亜管糜 依生稽 持唾鞠嬢 井猷 鎧走 暗税 巷猷鞠嬢 尽揮 昔娃税 鎧檣持醜、聡 舛
 重旋、宿軒旋 室域研 齒稽錘 呪狛引 什展析稽辞 旋蟹虞馬惟 督壱窮 依戚釀陥。⁽⁵⁾

(20世紀初頭に入りながら、西欧の文学、特に小説文学において大きな転換期が到来したのは広く知られている事実である。いわば現代心理作家たちは従来に表現不可能なものと考え、軽視もしくはほとんど無視してきた人間の内面生活、即ち精神的、心理的世界を新しい手法とスタイルで赤裸裸に掘り下げたものだった。)

この心理主義の小説家たちがみせる新しい人間の内面生活に対する省察はそれが新しい手法の次元で小説の変化だけでなく、心理学を背景に心理が持つ人間の本質把握から得た一つの新しい文学の創造的実験であったと言える。未知の精神世界が関与する人間の内面

世界の詮索は表出方法に新しい小説の変化をもたらした。心理小説の場合と同じく、戦後の現実を盛り込んだ小説の場合、その変革が必然的なものだったといえる。この変革の渦中で西洋的なものと韓国的なものの接合過程が赤裸裸に提起されているものがある。これは張龍鶴（チャン・ヨンハク）⁽⁶⁾の「推廩獸増」「ヨハネ詩集」を例にとってみる事ができる実存主義⁽⁷⁾の問題である。

昔娃税 切政人 宋製税 叔糲旋 鋭誤拭 旋杯梅聖 依戚壺 穿戟戚 照移 爽澗 搾馭税
呪遂引 益 浮彫拭 旋杯梅聖 依戚陷 聡 叔糲爽税税 勸聖 搭背 切焼税 馱馱旋 糲仙
丞縦拭税 蓄姥研 獸龜馬揮 益拭惟 穿戟戚虞澗 搾風廩 獸患精 琶尻旋生稽 宋製拭税
税縦聖 握惟 馬心壺 蟹焼垂 嘶杷拝 呪 蒸澗 雌伐引税 淫域紗拭辞 切焼税 税耕研
蝶惟 鞠釀聖 依戚陷。⁽⁸⁾

（人間の自由と死の実存的究明に適合するもので、戦争が抱かせる悲劇の受容とその浮彫に適合するものである。即ち、実存主義の目を通し、自我の究極的存在様式への追求を試みた彼に戦争という悲惨な試練は必要的に死への意識を持たせ、さらには回避できない状況との関係の中で自我の意味を掘り下げたものである。）

張龍鶴の「ヨハネ詩集」に関する実存主義的人間観の解明は実存主義の流入とその解明さらには実存主義の韓国的土着化を究明する事で可能になる。「ヨハネ詩集」がその小説的意味を自由に関する思惟を通して、哲学的陳述の価値を持ったという点⁽⁹⁾や論理的陳述や内面の独白と哲学的時間構造の混在により従来 of 伝統的小説様式とは違う様相を帯びている。⁽¹⁰⁾とみた場合、それが実存主義との脈絡に及ぶ関係の解明は実存主義に関する検証が先立たない場合、韓国小説から実存主義の影響を探し出すのは難しいと思われる。

戦後の韓国現実に文化的改革の徴候が現われ、それが小説のジャンルを通して、その具体的な現実像をみせ始めるところに50年代以降の韓国小説に展開された一筋の発展様相の種を探し出せると考えられる。

従って巨視的眼目で、20世紀初頭から変わり始めた文化改革の中心的気流を通し、戦後韓国小説がみせたいくつかの特性を分析してみる事で今日の韓国小説文学が持つ属性の根拠を考察してみる。

II 個物的「生」の意味

1945年の韓国は人間存在に関する探索の実質的内容が伝播されてきた自由な受容の時期

であったといえる。しかしこのような時期の雰囲気は韓国文学史が持つ主体的様相の問題を検討してみる時、いくつかの視点を考えてみる事ができる。それは解放当時の韓国の文学的条件はいくつかのどうする事もできない問題を抱えていたという事実である。

それは一番目に1945年の解放は、それが自主独立ではないという点で分断を何の抵抗もなく受諾するしかなかった状況を意味する。従って、これは作家の意識を活性化させ、それを通し国家単位の総体的民族文学の意味を減少させる結果をもたらすものだった。⁽¹¹⁾

2番目にこの民族の分断により思考を硬直化された状態のまま6・25まで左右翼論争の熾烈な思想闘争の様相をみせ、6・25以後の共産主義に対する嫌悪病は歴史を総体的に観察するのに多くの障害をもたらし、深い省察の時期を持つ事のできない結果、自由に解放された社会を通じ、西欧的なものの流入過程のいろいろな能力を持つ事のできる余裕を持てなかった。

このような韓国的現実の問題は6・25を経ている間、民族の大移動が展開される状況の中で、西欧的変革の真正な意味を韓国的現実の次元で受け入れる事になる要因になる。即ち、人間存在に対する探索の問題もやはり第2次世界大戦がもたらせた世界的文化変動の視野とは違い、韓国の6・25がもたらした同民族相争うという虚無主義的色彩に変化してしまう場合がそれであるといえる。

不条理の文学、または実存主義文学とよばれる西欧の新しい文学思想がこのような韓国的現実に適合する場合に持つものは6・25以後、1950年代の「生」の意味に対する作家たちの認識を新しく持った時に成立したという点で注目する必要がある。

それは廃墟化した国土の中で植民地文化からの断絶された民族主体の伝統の流れに対する確然とした認識と反省が伴わない状態で直接的に解放された世界との接触を通じ、体験できた人間存在に対する懐疑だったという点と文学的感性が体系ある変換の歴史的変動と一致しないという点を挙げる事ができる。

それはまず国家や民族が一つになる完璧な新生国家の新しい視野から異質文化に対する受容様式を探索する立場であったというよりは戦争の残酷な試練に耐えている、より狭い次元の中での一つの個物的「生」の意味を考えさすもので、この個物的「生」の社会的疎外の産物という印象を与えるには十分なものだった。

また6・25以後経験した政治的状況の複雑な不安定はそれが制限され、部分的な歴史の残滓であるといっても文学的感性を通じた先駆者的能力を発揮しないわけにはいかず、現実的な障壁が横たわっていた状況、つまり人間と神、人間と社会、または人間と自然の具体的な対立を通じた親しくも瞑想的であり、体系ある論理の成立を妨害する要素になったものなどといえる。つまり、個物的「生」の意味がなぜ生存しなければならないのかという根源的問題に対する関心として拡散されたというより、現実に投げ出された自我の実状を把

握する方法に力を注がずにはいられないものだったといえる。

III 小説における属性の変化

休戦と同時に新しい社会が躍動し、文学の発表機関も多くなり、新しく路線を敷き始めた作家たちが彼らの「生」の表徴である作品を発表し始めた。実際に戦後の小説家たちは歴史的現実の不運を直接体験しながら、西欧文化の変化を直接経験しながら出発したのである。彼ら作家たちは解放と6・25を経験している間に作家的気質が多様化し、関心の核心を整理していける文壇の主体性の傾向は探し出せないでいたが、いくつかの点で彼らがみせた共通の気質をみてみると、まず戦争を体験した作家という点で人間と戦争が醸し出した悲劇の認識が彼らにおいては実感できる現実であるという点であり、次に社会現状の不安定さからくる社会体系に対する不信と変質されていく社会構造の矛盾等を直接経験してきているという認識が彼らの下敷になっているという点である。

このような共通の下敷に文壇の中心であった『薄企庚俳』（現代文学）、『紫雌域』（思想界）、『庚鉢森綴』（文学芸術）、『庚森』（文芸）等を通して、彼ら特有の戦後の雰囲気を含めた作品を発表する事ができた。当時の作家たちの作品制作のモチベーションをみてみると

益訓 被歳拭 塾食 赤揮 嬢汗 効、店頭拭辞 暗薦亀 匂稽呪遂社持醜税 呪奄研 益 護
護 舌檜聖 石惟 鞠釀陷。紫寓聖 郊是研 恭嬢襟形 生凹嬢 宋昔陷窮走 勸硝聖 嗣壱
坪研 亀形 鎧壱 紫走研 金嬢 鎧嬢 痕社拭 煽隔釀陷窮走 馬澗 舌檜精 朔迫装聖 析
生迭 幻糜 依戚釀陷。益 随壱 肅精 穿晴聖 照壱 沙呪至拭 臣虞人 煽 蔣郊陷 呪囓
識拭 費耕糜 暗薦税 島影聖 左紹聖 凶 鎧 原製拭 但拙水戚 借焼 臣串陷。⁽¹²⁾

（そんな興奮に包まれていたある日、店頭に巨済島捕虜収容所生活の手記のそのいくつかの場面を読む事になった。人に岩を落とし、碎き殺すとか目玉を割り貫き、鼻を切り取り、四肢を挽ぎ取り、便所にぶち込んだとかいう場面は貧血を起こすぐらいのものであった。その泣き出した戦慄を抱き、ポンス山に登り、その前の海の水平線にかすかな巨済の島影を見た時、私の心に創作欲が沸き上がった。）

張龍鶴がその当時捕虜収容所で恣行された捕虜どうしの殺し合い、ひどいリンチ事件の光景を見て語ったものだが、これは、6・25の全体状況を物語るものだった。6・25以後の張龍鶴の作品、特に「ヨハネ詩集」「円形の伝説」はこの状況をどう把握し、どう答えたら

よいのかという問いに答えようとしたものである。「生」の絶対的価値に関心を抱くようになったという告白はそれだけの印象と認識からきているのではないかといえる。

昔娃戚空 依戚 鋼球獸 壺壘糜 税耕幻聖 陷勲生稽 埋藏馬吉 赤澗 韻至析 呪澗 蒸聖
依戚陷 昔娃税 持醜戚 衣坪 淫割旋昔 税耕税 盜旋戚蟹 尻衣稽幻 析淫吃 呪 蒸陷
澗 依戚陷, 左陷 希 巷税耕糜 檣税 刊旋績聖 醉軒澗 降胃備奄 孃憩走 省聖 依戚
陷。(13)

(人間というのは必ずしも高価な意味だけを多量に埋蔵している鉱山ではないのだ。人間の生活が絶対的観念的な意味の堆積やつながりだけで一貫性を持たず事はできないのだ。より無意味な面の累積である事を我々が発見するのは難しくないであろう。)

孫昌涉(ソン・チャンソプ)⁽¹⁴⁾の制作動機は、彼の「流失夢」を制作した動機に対する暗示でありながら、無意味な生活の累積が意味する「生」に対する愛着の根拠に込められている存在に対する懐疑を感じとる事ができる。

張龍鶴と孫昌涉の場合と同じく、彼らは極限状況の中でこれに対応する人間の姿勢が自由や真実の観念的で抽象的な面から得られる解決の対応力を研究しようという側面と「生」の無意味性を通じて、「生」それ自体の価値を否定する事で新しい脱出を模索する姿勢というものがみとれる。このような姿勢の追求は小説の特異な様式を中心にしてみる時、いくつかに分類する事ができる。李御寧(イ・オリョン)は①形而上学的な現代人の属性を持った内面的な状況を描き出す小説と②韓国的メトロポリタンとして風俗批評の方法を用いる小説と③ハイティーンの問題を扱う小説と④告発的、またはヒューマニズム文学とよばれる人間性擁護の小説⑤否定の文学、ニヒリスティックな文学とよばれる小説として、この地の風土で現実を現実のままに認めながらも、ある肯定的な人生の明るい光をとり出そうという小説に分類している。⁽¹⁵⁾

実際にこのような分類は小説の本質に対する究明に小説性向の目録的な意義を持つものだといえる。そしてこれら戦後小説の共通した問題を浮き彫りにさせる一つの方向を成す。

従ってこの問題を統括し、いくつかの戦後小説の包括的な性格を導き出してみると、一つ目としてこれら小説群がみせる性向は自我の認識において社会的な共感による座標を設定していない。即ち、思想と思想、人間と人間、人間と「生」の指標との間に起きる反応が対立的であるとか、または対照的であるという様相を持つだけであり、それが新しい人間の創造性を持たないという事実である。

このような性向は日本の植民地下において蔡萬植（チェ・マンシク）⁽¹⁶⁾、廉想渉（ヨン・サンソプ）⁽¹⁷⁾ などにより書かれた家族史的小説の伝統が民族的「生」の営みがどのように展開されていくのかに焦点が合わされ、李孝石（イ・ヒョソク）⁽¹⁸⁾、玄鎮健（ヒョン・チンゴン）⁽¹⁹⁾、羅稻香（レ・ドヒャン）⁽²⁰⁾ らに続く一筋の自然や近隣所との親和と調和をとり入れ、それを通し、現実に対する冷たい視線を収斂させていくという方法、あるいは李孝石の場合のように自然の循環と人間本然の生命感が調和を成す様式の流れがあった。

この流れは植民地と化した祖国に対する民族主義的な性向の逆説的接近ともいえるが、その当時の現実を昇華しようという文学的感性の独特で多様な試みの一つの流れだという事ができる。これとは違い、戦後小説の場合解放と6・25を経ている間に、このような共感域を脱出し、個物的「生」の傷をのぞき見るとかそれを慰めるとか、その傷によって病人になった自分自身を振り返ってみるのだが、その場所には何の共通性も何の意味もないのである。

2つ目に虚無主義的色彩の濃度が濃い点である。

戚 越聖 床奄 是背 食君 拙亜級税 越聖 石生擒辞 蟹潤 陷獸 蟹税 亜戎 燕紗戚 醇粕 赤揮 曾奄亜 斗走潤 牛糜 焼把聖 汗下潤汽 益依精 益 拙念級戚 蟹拭惟 揮閃 爽潤 巷奄径糜 買巷爽税税 蛙齒 凶庚戚釀陷 益依 凶庚拭 蟹潤 陷獸 糜腰 糜厩庚 俳税 基調研 戚欠壺 赤潤 搾鯨失旋昔 買巷爽税亜 1955鯨聖 蒋及稽 馬食 庚館拭 蟹紳 拙亜級拭惟辞採斗 置悦税 金承鉦拭 戚牽奄猿走 韻骨是馬惟 徵燈嬢孃 赤潤 依聖 滂昔拝 呪 赤釀陷。⁽²¹⁾

（この文を書くため、いろんな作家たちの文を読みながら、私は再び私の胸深くにできていた腫物が裂けるような痛みを感じたのだが、それはその作品が私に投げ込んだ無気力な虚無主義の臭いのためであった。そのため私は再度、韓国文学の基調を成している非個人的な虚無主義⁽²²⁾ が1955年を前後にした文壇に出た作家たちから最近の金承鉦（キム・スンオク）⁽²³⁾ に至るまでの広範囲に浸透しているのを確認する事ができた。）

益依精 戚檣税 買巷爽税亜 辞姥税 買巷爽税人潤 悦沙旋生稽 陷牽陷潤 依聖 蟹展鎧 奄 是糜 依戚陷 蟹稽辞潤 買巷爽税空 鯨昔引 謝説走 省潤 糜 糰仙拭 企糜 惡糜 税縦引 暗奄拭 企糜 明澄糜 搭茸聖 穿薦稽 馬走 省潤 糜 叔税人 端割税 疑税嬢拭 走蟹走 省奄 凶庚戚陷。⁽²⁴⁾

(それはこちらの虚無主義が西欧の虚無主義とは根本的に違うというのを現わすためのものだ。私としては虚無主義とは個人と手をつながない限り、存在に対する強い意識とそれに対する明澄な洞察を前提にしない限り、失意と諦念の同義語にすぎないためである。)

これは注意深く非個人的な虚無主義が失意と諦念の内容と同一視されるという点を暗示している。そうしながらもこの失意と諦念の色彩が独特の韓国的虚無主義の色彩を持ったという点で注目してみる必要がある。李範宣(イ・ボムソン)⁽²⁵⁾の場合、彼の「章妊」(暗票)の虚栄感が社会と人間の交流を否定的に受け入れながら、盲目的で一辺倒な我執の人間型として登場したのをみる事ができ、この虚栄感を通じ、虚無主義の濃度が非個人的なものであるのを確認できる。そうでありながら虚栄感は韓国の伝来的「生」の根拠が崩れて、その廃墟の基盤に対峙する事のできる志向的「生」の臭いを嗅ぐ事のできる対応物を提示する事のできない状況であったのは否定できない事実である。

また孫昌渉の場合、「跡食昔娃」(剰余人間)に登場する3人の人物、「辞幻奄」(ソ・マンガ)、「辰斥層」(チェ・イクチュン)、と「探裳醉」(チョン・ボンウ)等を人間として「生」を営む存在ではなく、〈そう与えられた存在〉としてただ生きているだけなのをみてとれる。

それらは彼ら作中人物たちが状況を克服しようという意志を失い、彼ら自らが社会に対処していけない存在であるのを彼ら自らの生活圏の中で確認させている。

李範宣の「誤発弾」に出てくる計理士‘勺旦裕’ (ソン・チョルホ)の場合も彼の「生」の軌跡が個性的な「生」の形態をみせる事のできない虚無的であり、自嘲的な順応主義の一断片を演出している。即ち、ソン・チョルホは彼の家族たちによって自分自身を少しずつ摩滅させ〈困窮している良心の垣根〉に満足している。李範宣が彼の作家ノートで明らかにしているように一日中、月給取りが仕事をし退勤時間に洗面台に立ち手を洗う時、手についたインクが水に溶け、流れているのを見て、血が体から流れているような錯覚をおこすといっている。それはつまり摩滅している自分自身に対する認識であるといえる。それでも彼はその摩滅を克服する事のできない諦念が頭から離れないのであろう。それは生活や思想や社会現象に対する自我喪失の姿勢が証明している。

この虚無主義的色彩と同様、また別の特性としてあるのが悲劇的感性である。

鎧析精 誌淑 鯁 悦紗妊但縦戚 赤聖 依戚釀陷. 益 陷製精? 昔娃拭惟 採企灰企稽 採
企晦壺 蟹辞 社遂戚 蒸孃遭 弘闇級戚 床傾奄虞澗 戚硯 焼掘 搭紗拭 坦酵縛陷亜 災
拭 効焼亜窮亜 競 紗拭 督康備牛戚 切奄龜 戚 馬漙 焼掘 孃汗 姥汐拭 坦酵縛陷亜

凶亜 神檜 仙亜 鞠窮亜 秘戚 鞠窮亜 馬澗 依戚陷。

昔持 神淑 鯁精 杏釀陷。醉端厩戚 醉啜厩戚揮 獸箭探斗 西鎧研 搔宿生稽 鋼井
誌淑軒 掩聖 腰哀焼 杏釀陷。設貝 庁姥級戚 祈葛伯戚猿稅 室晦獸 (赤子) 亜 吉陥杏
効帖揮 獸箭拭龜 益煽 脊聖 伽 陥弘杏 杏釀陷。

戚薦 益 鞍澗 析龜 神渥稽 原走敵戚陷。杏聖 析繕託 蒸澗 昔娃戚 鞠澗 依戚陷。
巷讓 凶庚拭 杏釀澗亜? 乞献陷。益煽 杏釀陷。「凶庚」拭 紫澗 切級精 陥 設貝 紫寓
級戚陷。鎧惟澗 「凶庚」戚 蒸陷。⁽²⁶⁾

(明日は、30年勤続表彰式があるのだった。その次は?人間に悩まされただけ悩まされ、役に立たなくなった物たちがゴミという名のもと、ゴミ箱の中に閉じ込められるか火に焼かれるか土の中に埋められるように自分もこの空の下どこかの片隅に閉じ込められ、時が来れば灰になるか土になるのだ。

人生50年、30年歩いて来た。郵便局が郵便局だった時から邑内⁽²⁷⁾を中心に半径30里、道を代わる代わる歩いた。優れた友人たちは天皇陛下の赤子になると氣勢をあげていた頃にもただしっかり口を閉じ歩いた。もうその歩く事も今日で最後だ。歩く事さえない人間になったのだ。何のために歩いてきたのか。わからない。ただ歩いた。「~のため」に生きている者たちはすべて優れている人たちである。私には「~のため」がない。)

金聲翰 (キム・ソンハン)⁽²⁸⁾の「爆笑」に出てくる郵便配達人の〈~のため〉という告白が意味するものはつまり、宿命に対する積極的な順応の姿勢でありながら悲劇的な運命観に対する諦念であった。この悲劇的運命観とは作家において悲劇的感性の誘導といえる。

悲劇的感性の作家たちは彼らが暮らしている現実に対し、合理的で功利的な連想よりも個物が経験している苦痛の質量を対象にしているのが一般的である。つまり現実に対する対応姿勢よりも現実自体が不条理だという認識からその不条理に束縛され抜け出せない人間の類型に愛着を感じるという点である。

次に50年代の小説が持っていた主人公の属性と事件展開の問題点を微視的眼目で分析してみる。まず小説においての視点を作中人物に限定してみると50年代に主人公はその性格の形成過程から違った小説技法を使っている点を見ることが出来る。1945年以前の伝統的小説がその対象としていた時代性と歴史性の変質によって、より現実性を持たせようとする小説様式の変化は当然の事だといえる。

まず小説様式の変貌の中、印象的な部分は人物を創出する(性格化)の方法での差異であ

る。性格化の基本骨格になる外見の構成を対比させてみると伝統的な小説における個人的外見を中心に特徴的な人間像を目標としている。これとは違い、戦後小説は日常的で平凡な姿を通し、作品全体の意味単位としての発展を念頭に置いているという点である。また動作や癖を通じ、性格の形成においても伝統的小説は行為の反復や特殊な癖の提示を通じ、個物的人間性の固形的印象を抱かせる。そのような伝統的小説とは異なり、戦後小説は行為の反復が人間の性格的類型を固形化せず、むしろ生きている普遍的人間像にその焦点を合わせるようにしている。これを実際に比較してみると、李光洙の作品「無情」⁽²⁹⁾の‘戚莫縦’（イ・ヒョンシク）という人物は観念の表象になる性格型になっている。これはイ・ヒョンシクが持つ優柔不断な人間性に誘発されるだけの事であり、これと比較し李範宣の作品「誤発弾」の‘勺旦裕’（ソン・チョルホ）は彼が持つ無気力な人生における束縛は小説の進行によりその範囲の拡大が誘導されながら誰もが経験する現実性から普遍性を確得している。また対話の活用においても伝統的小説はストーリー展開のための手段として対話を活用する場合や主題の説明による場合や事件の劇的効果による場合とし、小説記述の一つの補助的手段であることをみることができる。これに比べ戦後小説は人間性の成立による手段として対話を利用し、葛藤の対立的状況を演出し潜在意識の一筋の暗示的露出の方法として利用される。

以上の対比からみられるように伝統的小説と戦後小説との間には小説美学的次元の隔たりがある。それは小説美学の新しい発展様式であるといえるが戦後小説の主人公が持つ属性を分析するためには、このような変化を考え合わさなければならない。戦後小説の主人公たちは2つの基本的性格構造を持っている点を挙げられる。即ち、彼らが悲劇的属性を帯び、また生きる事に対する気力が無い、みられないという事実である。

この代表的な作家として孫昌渉を挙げる事ができる。孫昌渉の小説に登場する主人公を分類すると一つ目に、失業者が大多数を占め、この失業者は戦後韓国社会の一番大きな社会問題であり、喫茶店には大学を出た高等ルンペンであふれんばかりであった。彼の小説「血書」に出てくる‘疑爽’（トンジュ）はアメリカ軍部隊付近や、あるいは喫茶店に座ってはいても一定の生活の基盤のない人物であり、「未解決の章」の‘格’（おまえ）そして「流失夢」の‘蟹’（私）、「剰余人間」の‘斥層’（イクチュン）等はすべて職業を持っていない。2つ目が生活を営んでいけない無能力者群である。「被害者」に出てくる‘佐層’（ピョンジュン）、「曠野」の‘疑裕’（ドンホ）、「剰余人間」の‘娑醉’（ポンウ）は自分自身の社会生活を営んでいく事のできない人間類型である。3つ目として病人を挙げられる。「血書」に出てくる‘但蕉’（チャンエ）は陰湿な部屋の中に閉じ込められた精神病患者の人間であり、「生活的」の‘授威’（スニ）彼女は部屋の中に落ちてくる雨を見ながら座っている病人で、足の悪い障害者で正常な生活ができない。「曠野」の‘秩娠’（チュンヨプ）、

「死縁記」の‘失鋭’（ソンギョ）、「未解決の章」の‘庚識持’（ムンソンセン）は皆、病人達である。⁽³⁰⁾

孫昌渉の小説の中心を成しているのは失業者、無能力者、病者等の主人公は彼が明らかにしたように私小説的な特性に由来しているものだといえるが50年代の主人公が持っていた悲劇的な属性と無気力の属性との結合が彼の否定的人間観を通じ、表出されたものだといえる。

謝但七税 戚旭精 鈎社旋 昔娃乞瑚精 昔娃戚 切重税 試聖 衣舛拝 呪 赤澗 税走旋
 糞仙析 呪 蒸陥澗 姿軒燕精 採舛旋 昔娃淫 凶庚戚陥 戚依精 搾駅税 据昔聖 重税
 費荊拭 黍 舌企 費遇税 益依引 雌搭馬舌 赤澗汽 戚依精 益 切重税 鯨昔紫人 縦肯
 走 背号 板税 肇空, 6・25虞澗 尻錫旋 朝神什 雌伐戚 衣杯敗生稽澗 戚欠嬢遭 依 旭
 陥。⁽³¹⁾

(孫昌渉のこのような冷笑的な人間侮蔑は人間が自身の生を決める事のできる意志的存在ではないという根の深い否定的人間観のためである。これは悲劇の原因を神の戯弄においた古代ギリシアのそれと相通じているが、これは彼自身の個人史と植民地解放後の混乱、6・25という連鎖的カオス状況が結合する事で成り立っているようだ。)

このような指摘は悲劇的な属性や無気力の属性を持つ主人公の個人的体験の潜在的な露出であるというより歴史的条件と一致させる事の一つの可能性を提示するものであるといえる。孫昌渉の作中人物の場合と同じく、病人や失業者などの完全に去勢された人間群ではないが人間と人間の正当な交流を遮断するとか「生」に対する欲求をぜいたくな賭け事により認識する主人公として鄭漢淑⁽³²⁾の「勸 鎧軒澗 鴻」(雪の降る夜)の‘陥艦燭’(ダニエル)をとりあげる事ができる。そしてこの脈絡で孫章純(ソン・チャンスン)⁽³³⁾の「誌去昔持」(三等人生)、徐權培(ソ・グンベ)⁽³⁴⁾の「費鉢旋」(戯画的)の人物は正常な「生」の意欲を喪失した人物たちである。

また宋炳洙(ソン・ビュンス)⁽³⁵⁾の「召軒鉄」(シヨリーキム)もまた運命を脱け出せないアメリカ軍部隊周辺のベちゃんこになった空缶のように「生」を放棄した人間たちで成している。このような生態は暗い現実、失意の人物、敗北感、無気力、疲労、失望、虚無意識⁽³⁶⁾で要約される。

この主人公たちがみせる悲劇的で無気力な属性はその主人公が繰り広げたドラマの構成にも深い影響を及ぼしている。張龍鶴の「圓形税傳説」(円形の伝説)からみられるように無残な自我洞窟の中心から脱け出す事のできない葛藤を書き綴ったものがそれである。彼

は6・25が円形のエピソードである事を説き、これはまず6・25は自由と平等との武力闘争であったと前提した上で、オリエントに始まった文明はヨーロッパに入り、フランス革命によって自由と平等という兄妹を生み出すがその後別れ、一方はイギリスからアメリカへ、他方はドイツからソ連へ、そして最後に円形を完成させつつ朝鮮半島において武力衝突したというもので、同じ一つのものから生じた兄弟の戦争を物語の中で実際の兄妹の近親相姦に置き換え、ストーリーを展開させているのだが兄妹の近親相姦という犯罪によって本来一つのものであったのが2つに分裂し、敵対していた状態は円形を描いて再び一つのものに戻るといふ筋書きだがその過程での悲劇の葛藤は人間のより深い内面とその本性を明らかにするという性格小説的要素を持っているのが特質となっている。

IV 戦後文学の特性

戦後小説における一般的特性は6・25にあり、同民族どうしの殺し合いとなった衝撃はあまりに大きく、その傷は深く大きかった。その体験の意味を追及するには時間が必要であり日常生活の回復が条件となった。50年代はまだその後遺症に苛まされ続けた時期といえる。実際に6・25は途方もない悲劇だったのを想起する時、社会変動の劇的転換の様相も明らかにしなければならないのと歴史的意義を確然とさせる必要もある。それは同民族が相争うという戦争だったという事だけでなく民族的受難の次元で生存と直結した「生」へのあがきだったという事実を考える時に明確になる。その上に世界史的な側面から20世紀初頭から起きた新しい人間観の変動により、韓国もその余波を受け、それを通じてまだ馴染んでいなかった西欧的思潮との葛藤を醸し出したのも事実である。アメリカ的な実用主義とフランスの実存主義の思想の発想は根源で見分けなければならないがこの思想的混流を生活から直接または間接的に韓国精神史の成立過程においてみる事ができる。このような混流する外来文化の韓国への流入と受容過程はさて置き、解放後経験してきた文学史的流動が韓国の総体的な「生」を描き、そして提示させるには及ばなかったのは、印刷物の不足、発表機関の粗末さ、文壇の決集力不足、学校における文学人口の基礎が固まっていなかった等、いろいろ制約されていたようだが何よりも韓国が自分たちの「生」を記録する次元で途方もない悲劇により自我の普遍的な認識体系を持てなかったという点を挙げる事ができる。

それはすでに50年代小説の主人公たちがみせた性向からも言及したが、当時の現実性を考慮する時、自我の普遍的省察の方法は60年以降の課題として移された。戦後小説の展開様相に対して社会史の変動との受け渡し関係をみせる具体的な証拠を探るのが大変なのは戦争が吹き荒れた焦土の上で新しく作り出された文学であったためと推察される。6・25以

後韓国小説は技法上において西欧の様式の直接導入により伝統的小説の方向から多元化された様式をみせ、また人間とは何かについて実証的で直接的な質問を投げかける主題意識を持つようになる。このような変化は挫折し、根を抜かれたような力のない人間性を虚無主義的色彩により、失意と諦念の泣き事的性格の現実告発であるともいえる。

韓国戦後小説文学の特徴として挙げる事のできるのは、まず前の時代が繰り広げる事のできなかった人間に対する直接的な声を持ったという点である。その人間の声は作り上げたものではない、自分自身の痛みが抑え難く叫ぶしかない悲鳴のように今、現在をしゃべらないわけにはいかない切迫性により、「生」つまり生きているのを証拠にしようとしたと感じられる圧倒感がある。次に戦後小説の韓国語で書かれた文章効果というものである。この文章はリアリズムの理論とは違い、肌と触れ合う感触を持ち、口から自然に流れ出る現実感をもった言語を指す。誇張されるとか歪曲された表現技法の産物ではなく、誰もが共感できる領域を持った世界を提示する役割をみせたという点である。最後に西欧文学の受容において小説美学的論議を可能にさせた実験をみせているという点である。それは50年以後60年代70年代に来て一層激しく成されたものだが西欧文学が持つ性向を組織的に理解し、その長短所を体系的に把握させる根拠を提示した点である。これはたとい、分断国家というハンディーキャップで共産主義的な属性を排除されたものだとしても世界に向かい同参する事で世界的な文化感覚に接する事ができたという点で注目する価値があり、戦後文学の生成過程の一部の断面を理解できると考えられる。

注

- (1) 1950年6月25日 朝鮮戦争勃発から1953年7月27日休戦協定調印までを指す。以下6・25は朝鮮戦争の事を指す。
- (2) 李在銃,『現代韓国小説史』民音社 1991年
- (3) 戦争小説が朝鮮戦争の渦中から戦後四月革命(1960年4月に韓国で起きた学生を中心とした李承晩政権打倒の大衆蜂起。四・一九学生革命,4・19ともいう)の前までという空間において形成された文学をいい、近代的性格の解放空間の文学を現代文学に転換させ、人間の存在を解明する存在論的文学の特徴を持ち、1960年代の民族的な自我の覚醒と社会の認識として変貌していく文学の基盤になったものをいう。
- (4) 1945年8月15日
- (5) 干勝傑,「現代心理小説拭 赤嬢辞税 獸娃」(『20室奄 慎厩社竺尻姥』,肯製紫,1981) p. 315
- (6) 作家,1921年咸鏡北道富寧出身。代表作としては「非人誕生」「易姓序説」「ヨハネ詩集」「円形の伝説」などがあり、特徴として既存の文学的慣習の破壊、漢字語と観念語の導入、意識の流れの手法を導入し、既存制度に対する拒否などが挙げられる。
- (7) 韓国に実存主義文学がいつ入って来たのかは明確ではないが、第2次世界大戦の後、特に1950年を

韓国戦後文学の様相変化

前後して本格的に入って来たものと考えられる。1940年代にはサルトルの「フランス人がみたアメリカ作家」(1946)、田昌植(チョン・チャンシク)翻訳の「壁」(1948)、梁柱東(ヤン・ジユドン)の評論「サルトルの実存主義」(1949)、金明遠(キム・ミョンウォン)のカミュの「黒死病」(ベスト)翻訳(1950)等が発表され、50年代には鄭明煥(チョン・ミョンファン)翻訳の「自由への道」(1958)、「壁」(1958)、方坤(パン・ゴン)翻訳の「嘔吐」(1959)等のサルトル作品と金鵬九(キム・ブング)翻訳の「カミュの文学と思想」(1958)、チョン・ミョンファン翻訳の「現代の証人」等のカミュの解説または作品翻訳が出て、実存主義が韓国の文壇を主導する印象を与えた。このような雰囲気は張龍鶴、孫昌渉(注(14)参照)吳尙源(オ・サンウォン)作家、1930~1985、平安北道宣川出身、主に戦争、戦後の社会と個人の生き方、政治的状况に関心をみせ、戦後の性格を精密に証言している。代表作「猶予」「黄線地帯」等)等の韓国の作家たちにも人間の条件追求という点で大きな影響を与えた。

張龍鶴の「ヨハネ詩集」もサルトルの「嘔吐」を読み、刺激され書かれたものである。(張龍鶴。「作家の辯」『歯混』1960)

- (8) 許素羅, 『廢厩薄企拙垂尻姥』政顕紫, 1983, p. 150
- (9) 千二斗, 『廢厩社竺税 觀點』庚俳引 走失紫, 1980, p. 216
- (10) 沿費左, 編著『韓國税名作』曾稽辞旋, 1990, p. 687
- (11) 金允植・沿薄, 『韓國文學史』民音社, 1973, p. 230
- (12) 張龍鶴, 「推廢 獸増引 叔糲」(『廢厩穿板庚薦拙念増』重姥庚鉢紫, 1964)
- (13) 孫昌渉, 「作業餘滴」(『廢厩穿板庚薦拙念増』, 重姥庚鉢紫, 1964)
- (14) 作家, 1922年平壤出身, 代表作として「血書」「剰余人間」「未解決の章」「流し夢」等があり, 特徴として陰鬱な雰囲気と不具の人間型を描き出し, 戦後の現実に反映させた。
- (15) 李御寧, 「問題性聖 蟬焼辞」(『廢厩穿板庚薦拙念増』重姥庚鉢紫, 1964, pp. 386~92)
- (16) 作家, 1902~1950, 全羅北道沃溝出身, 号は白菱。1925年から小説を発表, 初期はプロレタリア文学運動の同伴者的立場をとる。34年以降自虐意識と社会への揶揄, 攻撃のないまざった痛烈な風刺作品に転じる。代表的長編小説に世態描写にさえる「濁流」(1937)「太平天下」(1938)等がある。
- (17) 作家, 1897~1963, 本名尙變, 号は横歩。日常生活を緻密になぞる鈍く重い独特の写実的文章をもつ。代表作は, 三・一独立運動前夜の暗い社会を背景に虚無に陥った青年を日本自然主義の影響色濃い筆致で描いた「万歳前」, 封建地主, 開化期開明派, 植民地世代の一家三代を中心に, 1930年代の社会を再構成して写実主義文学の一つの到達点とされる「三代」等がある。
- (18) 作家, 1907~1942, 号は可山, 江原道出身。自然と人間の愛欲相を精緻な文章で詩的世界に作り上げる短編作家として名をなし, 代表作に「蕎麦の花咲く頃」(1936)をはじめ「豚」「粉女」「薔薇は病む」などがある。
- (19) 作家, 1900~1943, 号は憑虚, 大邱出身, 金東仁と共に近代短編小説の先駆者になった作家であり, 写実主義の基礎を作った。代表作として「無影塔」「赤道」「貧妻」等, 多数。
- (20) 作家, 1902~1927, 本名慶孫, 筆名彬, 稻香は号, ソウル出身。浪漫的, 感傷主義的傾向で出発し, 繊細で洗練された感覚で生の現実を形象化した。代表作に「水車小屋」「池亭根」「火焰拭 促音 怨恨」等。
- (21) 沿薄, 『紫嘶人 星軒』, 析走紫, 1974, p. 69
- (22) 引用文は, 東仁文学賞(韓国現代文学の先駆者といえる金東仁(キム・ドンイン)を追悼し, 合わせて文学発展に寄与しようと1963年から毎年国内主要雑誌に発表された中, 短編小説を対象に審査され, 作品一編を選定し授賞している。)受賞作家を対象にした演薄の評論により非個人的虚無主義という用語が登場した。
- (23) 作家, 1941~, 日本, 大阪出身。彼の小説的特色は人間の内密性と社会関係における倫理的問題を掘り下げていくところにある。代表作に「ソウル1964年冬」「多産性」「霧津紀行」等がある。
- (24) (21) ib, p. 69

- (25) 作家, 1920~1982, 号は鶴村, 平安南道新安州出身。代表作として「暗票」「誤発弾」「俳原聖 紫寓級」「哀古奄」等があり, 特徴として人間の肯定的矛盾を追求しようという存在としての懐疑的虚無が内包した穏やかなヒューマニティーをみせた。
- (26) 金聲翰, 「爆笑」1957
- (27) 道の行政区域の一つ(人口2万人以上5万人以下)
- (28) 作家, 1919~, 咸鏡南道豊山出身, 彼の小説は人間の尊厳性と正義の具現を積極的に実践する行動的, 反抗的な人間を創造, 文学史に新しい人間形の可能性をみせた。代表作に「無明路」「五分間」「ハビド」等を発表した。
- (29) 「無情」, 李光洙(1892~?)の長編小説。1917年「古析重左」(毎日新報)に発表し, 連載された韓国最初の現代長編小説である。近代文明に対する憧れ, 新教育思想, 自由恋愛の讃称等が主題を成し, 当時読者たちの多大な関心を集めただけでなく, 韓国現代文学の出発を知らせる先駆的意義を持った作品として評価された。
- (30) 朴東奎, 『薄企麁厩社竺税 失維尻姥』, 庚俳捨紫, 1981, p. 138
- (31) 金炳翼, 「圓形引 伊装」(『薄企麁厩併税 戚経』, 肯製紫) p. 341
- (32) 作家, 1922~, 号は一悟, 平安北道寧邊出身。特徴として一つの主題にとらわれず, いろいろな方面に関心を傾け, 小説技法の多様な作家と称され, 代表作として, 「田黄堂印譜記」「道程」「戚失域」「轄鯨」などがある。
- (33) 作家, 1935~, ソウル出身。知的分析と状況の中の存在探求というフランス文学の影響を強く受け, 人間の内部構造を探求し, 代表作として「不動産仲介人」「対話」「耐潤 切人 耐奄潤 切」等。
- (34) 作家, 1928~, 全羅南道木浦出身。彼の作品の作中人物たちはほとんどが良心的な人間像ではあるが, 裏切られ, 犠牲になり結局人生の敗北者となる。不条理な社会を簡潔な文体で掘り下げ, それを告発する現実意識の強い作家で, 代表作に「性格」「目撃者」「肉弾」等がある。
- (35) 作家, 1932~, 京畿道出身。作品素材が多様で初期には戦後世代の現実を主に描いたが近来には日常生活の中の不条理な人間の現実を暴くのに力を注いだ。代表作に「22番地」「残骸」「倦怠」等。
- (36) 白鐵, 「戦後 15 鯨税 麁厩社竺」(『麁厩穿板庚薦拙念増』, 重姥庚鉢紫), 1984, p. 381
- * 引用文の漢字は, 人名・題名を除いて常用漢字に改めた。

参考文献

- | | |
|-------|-----------------------------|
| 李在銃 | 「現代韓国小説史」
民音社, 1991 |
| 干勝傑 | 「20室奄 慎厩社竺尻姥」
肯製紫, 1981 |
| 許素羅 | 「麁厩薄企拙亜尻姥」
政顕紫, 1983 |
| 干二斗 | 「麁厩社竺税 観點」
庚俳引 走失紫, 1980 |
| 沿費左編著 | 「韓國税名作」
曾稽辞旋, 1990 |

韓国戦後文学の様相変化

- | | |
|----------|------------------------------|
| 金允植・沿薄 | 「韓國文學史」
民音社，1973 |
| 張龍鶴 | 「作家税辯」
『齒混』1960 |
| 孫昌涉 | 「焼原鏑嬢作家税辯」
『紫雌域』1965 |
| 朴東奎 | 「薄企麁厩庚俳税 矢維尻姥」
庚俳室域紫，1981 |
| 金炳翼 | 「薄企麁厩庚俳税 戚経」
肯製紫 |
| 白鐵 | 「厩厩穿板庚薦拙念像」
重姥庚鉢紫，1984 |
| 辛卿得 | 「韓國戦後小説研究」
一志社，1983 |
| 語文閣編輯部編 | 「韓國文藝事典」
語文閣，1988 |
| 金相善 | 「新世代作家論」
白新社，1982 |
| 金宇鍾 | 「韓國現代小説史」
成文閣，1982 |
| 伊藤亜人 他監修 | 「朝鮮を知る事典」
平凡社，1986 |